

Title	『文學界』同人の「繩墨打破」的バイロン熱
Author(s)	菊池有希
Citation	聖学院大学論叢, 第 26 卷第 1 号, 2013.10 : 252-272
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=4588
Rights	



聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository and academic archiVE

『文學界』同人の「繩墨打破」的バイロン熱

菊池有希

抄録

明治期を代表するバイロン受容者の北村透谷の死は『文學界』同人にバイロン熱から脱却する機会を与えた。彼らにとってバイロニズムとは、社会的・道徳的・宗教的規範に反抗する「繩墨打破」の精神の謂いであり、彼らは恋愛問題をめぐる鬱屈を各々抱えながら、「繩墨打破」の恋愛詩人としてのバイロンに心酔していたわけであった。彼らの「繩墨打破」的バイロン熱は、透谷の思想的影響下に醸成されたものであったが、透谷のそれに較べて深刻さに欠け、また思想的内実にも欠けるものがあつた。それは、彼ら自身打破すべき規範を明確に認識し得ないでいたことに起因している。彼らのこの甘い認識こそ、透谷死後、自身の曖昧な「繩墨打破」的バイロニズムを放棄せざるを得なかつた主要因なのであつた。

キーワード 『文學界』、バイロン、バイロン熱、バイロニズム、「繩墨打破」

一、北村透谷の死とバイロン言説の変質

ことである。明治前期を代表するバイロン熱罹患者であつた透谷の死は、日本におけるバイロン受容史の中でも一つの象徴的な意味を持つ事件であつた。

北村透谷が自宅の庭で縊死したのは、明治二七年五月一六日未明の

透谷が死んだ翌月、明治二七年六月の雑誌の幾つかは、透谷への追

悼記事を掲載している。バイロンとの関連で言えば、『裏錦』に掲載された機曲生署名の「北村透谷を吊す」が、まず注目されるだろう。この追悼文は、透谷の死が透谷の厭世によるものであり、透谷の厭世は透谷の「眞面目」によるものだ、と同情的に論じた上で、「世にバイロンの狂暴を嘲笑して、而して彼が満身の赤心を知らざるものあり、かゝる人々に向ふて君の一生を説くとも、何の感ずるところもなかるべし」^①と書いている。ここでは、バイロンの「満身の赤心」に思いを致すことができないような人間には透谷の「満身の赤心」に対しても正しく思いを致すことなどできない、というかたちで、バイロンの内面と透谷のそれとを重ねあわせて論じていることが注意を引く。これは明らかに生前の透谷のバイロンへの偏愛ぶりを偲んだ言であり、この文章の書き手は、バイロンの内面の誠実と透谷のそれとの双方に共感しつつ、それを貴ぶということをしているのである。

だが、このような、論ずる対象としてのバイロンの内面に共感を寄せる、言わば透谷的な語り口とは異質なバイロン言説が、透谷の死のまさに同時期に現れていたという事実にも注意しておかねばならない。

透谷の死と同年同月の『早稻田文學』は、バイロン関係の記事を二篇掲載している。一つは、鄭澳生こと奥泰資の「バイロン卿の傳」であり、もう一つは、K. A. 署名の「バイロン卿を論ず」である（後者の記事は翌月にもその続きが掲載されている）。これらの記事に特徴的であるのは、透谷のバイロン言説に象徴的に表れたような、バイ

ロンに自己を投影しつつバイロンについて肯定的に語るというかたちの熱っぽい語り口が影を潜めているということである。例えば、前者のバイロン伝の記事は、バイロンの一生における重大事件をほぼ満遍なく網羅した、比較的長文のものであるが、論者の主観に流れたような記述はほばないと言ってよい。このバイロン伝は、バイロン自身の日記の記述やバイロンの友人の証言などを資料に基づいて提示してゆくという、極めて客観的な筆致で書かれている。また、バイロンの詩業に関する記述にしても、作品の名前は詳しく列挙されているものの、その作品世界について踏み込んだ論及はなく、この点においても、バイロンの内面に迫っていないこととする論者の意思を感じさせるものとはなっていない。

もう一つの『早稻田文學』掲載のバイロン記事である、K. A. 署名の「バイロン卿を論ず」も、「バイロン卿の傳」と同様、非常に冷静な筆致で書かれたものである。こちらは「バイロン卿を論ず」と題されているだけあって、「バイロン卿の傳」にはなかつた論者の主観的解釈が一応散りばめられてはいる。だが、その解釈は概してバイロンに対して否定的なものである。論者は、バイロンを「赤心あるをもて偉大也」と言いつつも、直後に「然れどもバイロンは赤心餘りありて度量欠けたり」と述べている。そして、「彼れは過多の赤心、過少の度量の人なりき」とまで断じている。^③論者によれば、バイロンは、理想を持つことなく自身の卑小な自我に拘った、「智の人ならで情意の人」であり、そのようなバイロンの人格は、彼自身の生活、事業、詩想、作

詩に悪影響を与えている、とのことであつた。論者は、バイロン自身の言葉を引用しつつ、このような趣旨の主張を淡々と展開してゆく。そして彼の達した結論は以下のようなものである。

彼れは特別な意味に於て吾人が貴重なる師友也。彼れが吾人の師友たるは、其の厭世家たるの邊にあらず、其の赤心の偉力を教へたるの邊にあり、度量を欠ける赤心の如何ばかり危険なるかを教へたるの邊にあり、過去を忘れ得ざるものが強ひてこれを忘れんと試むるは、寧ろ之れを記憶し、以て戒慎し、以て自省し、而して猛進するに如かざるを教へたるの邊にあり、周圍の障害を打撃しつゝ、怒號しつゝ、狂奔するは、遂に前途の理想を仰望して綽々再歩するに如からずを教へたるの邊にあり、總べて云へば、一方に自省修練の必要を怠たるの邊にあり。嗚呼、此の點より見る時は、宇宙に於けるバイロン卿が位地は天と共に長く地と共に久しかるべし。⁴⁾

先に言及した『裏錦』掲載の機曲生署名「北村透谷を吊す」も、バイロンの「赤心」について論及していたわけだが、この「バイロン卿を論ず」における語り口が、「北村透谷を吊す」におけるそれとは全く逆になっていることが注意される。「北村透谷を吊す」の記事がバイロンの「赤心」について、バイロンにおける理想への意志の存在を証明するものとして肯定的に語っていたのに対し、「バイロン卿を論ず」

の記事は、バイロンの「赤心」過多に、「度量」の欠如、「理想」の欠如、「自省修練」の欠如を見て、それを否定すべきものとして語っているのである。つまり、バイロンの「赤心」が、一方では熱っぽく肯定され、一方では冷然と否定されている、というわけである。特に右の引用中の「嗚呼、此の點より見る時は、宇宙に於けるバイロン卿が位地は天と共に長く地と共に久しかるべし」という最後の文章などには、論者の嘲りの表情さえ看取しようとすればできるものであり、かなり皮肉な調子を感じさせるものとなっている。

このようなバイロンに対する否定的評価に関連して、「バイロン卿を論ず」の冒頭には、この論文の掲載の経緯についての、次のような「早稻田文學記者」による但し書きがある。

バイロン卿は歐洲にありては已に過去の詩人となりたれども我が文壇に於ては未だ遂に彼をもて過去の詩人と見做す能はず。本號及び次號に二分して掲ぐるバイロン論は社友K. A氏の寄送に係る、バイロンが爲人を評し得て頗る周細綿密なり。讀者若し此の論の爲に吾人が特にものせし前記の畧傳を精讀し扱後に本篇を繙かば庶幾くは得るところ少小ならざるべきか。⁵⁾

この文章でまず注意されるのが、冒頭の「バイロン卿は歐洲にありては已に過去の詩人となりたれども我が文壇に於ては未だ遂に彼をもて過去の詩人と見做す能はず」という一文である。これは、バイロン

が最早時代遅れの詩人であるのに、いまだにバイロンをもてはやしている観のある日本の文壇の現状に対して、「早稲田文學記者」が苦々しく思っていることが、間接的な表現のうちに滲み出ているような一文である。つまり、この「早稲田文學記者」による但し書きの文章全体の文意は、バイロンが時代遅れであることを読者に理解させるように、「社友K. A氏」のバイロン論を掲載し、なおかつその理解の助けのために「バイロン卿の傳」を掲げた、という意味に解釈できるのであり、比較的強いバイロン否定の意識を基に書かれたものだと言うことができる。そしてそこには、日本の文壇にバイロン熱からの覚醒を促し、新しい文學精神の芽生えを期待する意識も垣間見ることができ。

以上のことから仄見えてくるのは、透谷が死んだ明治二十七年の半ばという時期、海外の文學的な動向を意識した客観的なバイロン言説が、個人的な思い入れを軸とする主観的なバイロン言説に徐々に取って代わろうとしていたらしい、ということである。⁶ 恐らく、『裏錦』の「北村透谷を吊す」におけるバイロン言及とは対照的な、『早稲田文學』掲載の「バイロン卿の傳」及び「バイロン卿を論ず」の冷ややかなままで冷静な筆致の登場は、バイロンを問題視する視点が、論者個人の主観評価から文學史的な位置づけという客観評価に移行しつつあることを象徴的に表すものであった。⁷ 現に、それ以降のバイロン言説は、木村鷹太郎ら一部のバイロン熱罹患者によるものを除いて、例えば、抱一庵主人（原抱一庵）「バイロン」、『史海』、明治二十九年一月）、菱洲生「バイロンを論ず」、『青山評論』、明治三十二年三月）、上村左川「バイロン」

（『文藝俱樂部』、明治三十一年九月）、小日向定次郎「バイロンを讀む」（『帝國文學』、明治三十二年九月）、米田實「バイロン」（民友社、明治三十年）など、論者の主観のあまり感じられないものが増えてくるようになるのである。⁸

だが、このようなバイロン評価をめぐる過渡期において、全てのバイロン受容者が、主観的なバイロン肯定から客観的なバイロン否定に直ぐ移行できたわけではなかった。当然、中には、バイロンに対する心酔の度合いが強かった分だけ、激しく葛藤せねばならなかった人々も存在したのである。その代表的な一群が、シェイクスピアに次いでバイロンを愛読したという⁹、『文學界』に拠った人々であった。彼らは、主観的で主情的なバイロン受容者の代表格である北村透谷を筆頭に、明治前期ロマン主義の文學精神を牽引する言論活動を展開していたわけだが、明治二十七年五月の透谷の自死という事態に直面し、激しい衝撃を受ける。そして透谷の自死と透谷的なバイロン受容のありようとの内的関係を自らの問題として問い、その総括のために激しく葛藤することになるのであった。

この間の事情については、後年の島崎藤村の回想の文「『文學界』のこと」（『市井にありて』、岩波書店、昭和五年所収）などから、おおよそそのところを窺い知ることができる。

北村君を失つてからの私達は、次第に当時のバイロン熱から醒めて、思ひ／＼に新しい進路を執るやうになつた。頑執と盲排との

弊を打破するやうな声で充たされて居た私達の雑誌には、次第にダンテの紹介があらはれ、シエレエ、キイツ、ロセツチなどの紹介があらはれるやうになつて行つた。激しい動揺の時が過ぎて、青春に思ひを潜めるやうな時が漸くそれに代つた。

この藤村の文章から、『文學界』同人たちが透谷の死を、「当時のバイロン熱」からの覚醒、「頑執と盲排との弊を打破するやうな声」からの脱却、「激しい動揺」からの移行の契機として捉えていたことを窺い知ることができる。彼らは、透谷自死の時期の『裏錦』の記事と『早稲田文學』の記事の温度差に象徴される、過渡期にある時代精神の深淵を自らの問題として受け止め、何とか「激しい動揺の時」をやり過ごして「青春に思ひを潜めるやうな時」に至らんと苦悩した人々であつたわけである。

『文學界』同人における「当時のバイロン熱」とはいかなるものであり、また、それをめぐる葛藤はいかなるもので、そこからの覚醒はいかにして可能（あるいは不可能）であつたのか。そして「覚醒」後、彼らはいかなる「新しい進路を執るやうになつた」のか——。『文學界』同人の文学精神の諸相については、笹渕友一の名著『文學界』とその時代（明治書院、昭和三五—三六年）において多方面から詳細に論じられている。だが、（バイロン熱）という単一の視角からその変容・変質・屈折のありやうを明らかにせんとする試みは、管見ではこれまで本格的にはなされてこなかつた。この試みは、明治前期ロマン主義の

運命を見届ける上でも、また、日本におけるバイロン熱・バイロン受容の史的展開を辿る上でも有意義であろうと思われる。

従つて、筆者はそれを試みんとするものであるが、紙幅の関係上、本稿においては、『文學界』同人の「当時のバイロン熱」の内実の解明に専心することとする。そして、彼らのバイロン熱あるいはバイロンズムの抱えていた問題点を剔抉し、本稿を、他日発表すべき、『文學界』同人のバイロン熱をめぐる葛藤の諸相についての議論のための緒論としたいと考える。

二、『文學界』同人のバイロン熱の内実

では早速、『文學界』同人の「当時のバイロン熱」とはいかなるものであつたのかについて検討してゆくことにしよう。『文學界』同人にとつての「当時のバイロン熱」とは、先に引用した藤村の言葉を借りて言えば、バイロンに範を取つた、「頑執と盲排との弊を打破する」精神の昂揚の謂いである。

『文學界』は、もともと巖本善治の『女學雜誌』を母胎とした雑誌であつたが、創刊後直ぐ女學雜誌社から独立するところから歩みを始めていく。これは、『文學界』同人が巖本の清教徒的倫理観及び儒教的道徳観に基づく文学功利論の拘束を嫌つたためであつた。『文學界』はこの後、精神の自由を重んじつつ、文学・藝術の自律的・超越的価値を積極的に主張するロマン主義的立場からの文学論・藝術論を展開し

てゆくわけであるが、これは換言すれば、『文學界』同人が、個人の内面の自由を抑圧・拘束する既成の一般通念や社会道徳を「頑執と盲排との弊」と見立て、それらを果敢に打ち破り乗り越えていこうとする「繩墨打破」の精神を精神的支柱としていたということであった。要するに、『文學界』同人は、吉田精一が整理する通り、植村正久ら『日本評論』に拠る言論人の宗教的見地からの批判、また、徳富蘇峰ら『國民之友』に拠る言論人の現世的功利主義の立場からの批判に対して、この「繩墨打破」のロマン主義を旗印としつつ、北村透谷を中心に自らの立場の正当性を主張していったわけである。¹²そして彼らはその一環で、イギリス社会に反抗しキリスト教道徳にも反逆を企てたバイロンに、自らの「繩墨打破」のロマン主義的精神と同質のものを見出し、それに思い入れを逞しくするというかたちでバイロン熱の気分を醸成していったわけであった。彼らにとってバイロンは、まづもって、自己の外部の論理（社会的規範としての道徳律、宗教的規範としての戒律、政治的規範としての法律など）に対し自己の内部の論理をあくまで押し立ててゆく強固な意志と熱い情念を持ったロマン派詩人の代表的存在であり、彼ら自身のロマン主義的精神の言わば守護神的存在であつたわけである。

バイロンに対するこのような見方を示した文章のうち典型的なのが、馬場孤蝶の評論「想海漫渉」（『文學界』第二二號、明治二六年二月）である。この中で孤蝶は次のように述べている。

猛省せよ、今此世紀の始、英國の社會益々姑息に流れ、準繩に由てのみ事を行ふ悲運は、遂に彼のバイロン、シエレーの徒をして國外に客死せしめしに非ずや。任侠前者の如き頗る愛すべき點あり。且其の天來の詩想や發して天地の妙音を和し、遠く沙翁マーローの氣概あり。實に一代の詞宗英國詩伯たるに耻ぢず。然も國人凡常の眼光未だ高からず、彼が傑作多くは他の笑罵する所となる。彼が父母の郷を捨つるの憤慨思ふ可きなり。誰れか彼れを以て天を知らずと云ふ。彼其のドン、ジュアンに於て斗屑の輩を喝して曰く、

Some kinder casuists are pleased to say,

In nameless print—that I have no devotion;

But set those persons down with me to pray,

And you shall see who has the properest notion

Oh getting into heaven the shortest way:

My alters are the mountains and the ocean,

Earth, air, stars,—all that springs from the great Whole,

Who hath produced, and will receive the soul.

と。實に然り、繩墨の徒天才の翔に伴ふ能はず。彼の摩天の翼ある者を見て、異類なりと罵り、一朝蒼空に遊ぶに當つて、何故に彼等と共に地に在らざるやと咎む。(三五八頁)¹³

孤蝶はこの評論において、西洋の思想の流れを、旧思想を新思想が

打破してゆく前進的・進歩的な運動と捉えた上で、議論の結論として、西洋と同様、明治日本においても「偉大の觀念」を有する新思想が勃興すべきことを主張し、「無規法をも生み法外道を生ずる者、此れ我革新なれ。此我革命なれ」(三五九頁)と、急進的ロマン主義の精神の必要を高い調子で説いている。右の引用箇所のパイロンに関する論及も、そのような文脈の中でなされたものであった。孤蝶によれば、パイロン及びシェリーの海外脱出は、イギリスの既成の社会道徳の拘束による不自由を嫌った結果であり、孤蝶はそのことを、イギリス社会の偏狭を嘲笑したパイロンの『ドン・ジュアン』第三歌第一〇四節を引きながら論証している。この時、孤蝶の脳裏には、パイロンが破婚にまつわる醜聞によってイギリス社会から追われるように流浪の旅に出なければならなかったことや、パイロンの諸作(『カイン』や『ドン・ジュアン』等)がキリスト教の教えや社会道徳に抵触するとして批判されたことなどが併せて想起されていたに相違ない。その上で孤蝶

は、自分を非難する形ばかりのキリスト者よりも表面上はアンチ・クリストのように見える自分の方にこそ真の信仰心があるのだ、といった内容の、パイロンの『ドン・ジュアン』の詩節14の中に、旧思想の「準繩」に収まりきれない新思想を奉じる者の正義を読み取るということをしているのである。孤蝶にとって、パイロンを非難する側の論理は、「旧思想」の「準繩」として否定されるべきものであり、それに対立したパイロンは、「新思想」の側に立つ者として肯定されるべきものなのであった。そして孤蝶自らも、自身を「新思想」の側に与するものと

自己規定しつつ、「旧思想」の「準繩」を打破する「繩墨打破」の詩人パイロンに強く共感する自身の内面、即ち自身の「繩墨打破」の精神をここに表明しているのである。

この孤蝶の評論とほぼ同時期に書かれた戸川秋骨の評論「變調論」(『文學界』第一三號、明治二十七年一月)も、孤蝶のそれと同様のパイロン観及びパイロニズム観を披瀝している。この中で秋骨は次のように述べている。

宇宙万有に互りて一の靈氣あり、人間心裡の奥深き處に一の精氣あり、彼を呼んで造化と云ひ神と云ひ、此を名けて精神と云ふ、此の生命や發して万朶の櫻となり、凝つて不朽のポーエトリーとなる、其の社會に顯る、や革命となり、個人に顯れてはパイロニズムとなる、(二六七頁)

秋骨もやはり孤蝶と同様、歴史の推移を前進的・躍動的な運動と捉え、そのような歴史の運動の中の一現象としてある「パイロニズム」を、宇宙にみなぎる生命力が個人の次元で顕在化したものとして捉えるということをしている。秋骨によれば、宇宙の生命力とは、即ち「たへず這般の繩墨と秩序とを打破して進む」力の謂いであり、「パイロニズム」は、「這般の繩墨と秩序とを打破して進む」「繩墨打破」の精神の個人の次元における表れということになるのであった。15 秋骨は、人間の歴史、特に思想史の流れを、安定的で穏やかな「正調」の思潮と、

不安定で激しい「變調」の思潮とが繰り広げる交替劇として捉え、その上で今現在の時代を「變調」の時代、変革變動の時代と考える。そして秋骨は「西行の如きバイロンの如き然り、憐れむべし法規の世は彼等を容る、能はず不健全として蛇蝎視されたり」(二六八頁)と、西行やバイロンを「變調」の時代の先覚者として等価に扱いつつ、「繩墨」との葛藤がもたらす彼らの不遇の運命に対し、強い共感を寄せるのである。

このように、「文學界」同人がバイロンを「繩墨打破」のロマン派詩人の代表的存在として認識し、自己の自由を外部から拘束する様々な「繩墨」を「打破」せんとするバイロンに思い入れを逞しくしていたことが、彼らのバイロン言説から裏付けられるわけであった。¹⁶だが、「繩墨打破」の身振りの他にも、『文學界』同人のバイロンに対する共感を特に誘ったものがあつたことにも注意を払っておく必要がある。即ち、恋愛問題をめぐるバイロンの身振りがそれである。一般的に言つて、恋愛問題は、自己の自由と、それを阻む様々な規範¹⁷「繩墨」との間に生じる摩擦が顕在化しやすい問題であり、このバイロンの恋愛問題に対する『文學界』同人の思い入れも、恐らくはバイロンの「繩墨打破」の身振りに対する思い入れの同一線上にあるものと推測される。が、彼らのこの思い入れの背後には、恋愛問題それ自体に対する彼ら個人の固有の関心も息づいていたように思われる。

例えば、島崎藤村は、明治女学校の教師時代、教え子の佐藤輔子に恋愛感情を覚え、その抑圧からくる苦悩から漂泊の旅に出るのだが、

その際は彼はバイロン詩集を懐にしていた。このことは、彼の「かたむり」(署名は無聲、『文學界』第三號、明治二六年三月)という一文の中に示されている。彼はこの中で、「禿木子是我笈中にバイロンを納めたるをあやしみ」(第三號、七頁)云々と、自身の青春の彷徨に「バイロン」を携帯したことを告白している。これは、藤村が恋愛をめぐる自身の鬱屈をバイロンのそれに重ねて、バイロン詩の中に自身の内面の苦悩の慰めを見出そうとしていたことを示唆するものである。

また、藤村が旅の荷物の中にバイロンを忍ばせたことを目撃し見つけた「禿木子」こと平田禿木も、バイロンの中に恋愛問題をめぐる自身の憂悶の慰めを見出そうとしていたと推定される。『文學界』第三號には、藤村の消息文「かたむり」と並んで、禿木の文章「鬱孤洞漫言」も掲載されているが、禿木はその中の「其四(青年會月報五號參照)」という一節において、詩人の心を理解しないキリスト教徒の偏狹を批判しつつ、「誰かバイロン人を知らずと言ふ、彼が慘たる其血涙は之れニユーステッド佳人の爲めなるを知らずや」(二四九頁)云々と、バイロンの恋愛問題についてやや感傷的な調子で論及している。禿木がここで、「ニユーステッド佳人」ことメアリー・チョワースという一少女に失恋して少年バイロンが流したという「慘たる其血涙」に思い入れを逞しくしているのは、当時彼が恋愛感情を抱いていた星野天知の妹男子との関係のことが彼の念頭にあり、自身が内に抱える恋愛をめぐる葛藤の苦しみをバイロンの名のもとに擁護したいという意識が働いていたからであろうと推定される。¹⁷

さらに、その勇子の兄の星野天知も、恋愛問題で苦悩していた点で同様であった。天知の評論「骨堂に有限を觀ず」（『文學界』第六號、明治二六年六月）は、恋情や肉欲といった、「有限」なるものに向かう心情の儂さと哀しみを擁護しようとした文章であるが、この中に、「野花一輪の姿もなほ摘むに餘るライン河の草の露、舊都荒原の枯草もなほ憤るに足るシベル灣の露の雨、バイロンが戀の情けの悶えに非ずや」（二二六―二二七頁）という、バイロンの名に言及した一文を見つけることができる。天知がここで「バイロンが戀の情けの悶え」に思いを馳せつつ念頭に思い浮かべているのは、「ライン河の草の露」云々という言葉から、一つは恐らく『チャイルド・ハロルドの巡礼』第三歌中のライン河を歌った詩節であろうと推測される。このライン河の歌とは、破婚の醜聞の後、自己追放の旅に出て祖国イギリスを後にしたバイロンが、遠い異郷の地で自身の想い人である異母姉のオーガスタを想って書いたと言われているものであるわけだが、当時の天知もやはり、明治女学校の女生徒松井まんとの許されざる恋愛に悩んでいた¹⁸。こうして考えると、天知のこのバイロン言及にも、異母姉への許されぬ恋愛感情を歌ったバイロンの詩節に教え子に恋した自身のやるせない思いを仮託せんとする天知の心を偲ぶことができるように思われる。

他にも、例えば戸川秋骨の「バイロニズムの感染」は、笹淵友一が指摘するように、明治二七年頃の彼の恋愛問題をその背景に持っていたようであるし、また馬場孤蝶も、友人たちの恋愛問題、あるいは自

身の恋愛問題に思いを致しながら、恋愛問題に悩んでバイロンに慰めを見出す青年像を、小説「みをつくし」（『文學界』第二二―二四號、明治二七年一〇―十二月）において、「二も戀、二も戀、只世の中は何事も皆戀ならぬはなしと思ひ、此れまでは面白いと思ふた審美學の書籍などは、何にか物足らぬやうにて、讀みかけて未だ一二枚にもならぬに、巻をとちて投げ出し、とかく手に觸るゝはバイロンの詩集、エルテルが愁などなり」（三三三頁）というかたちで描き出している。

このように、『文學界』同人のバイロン熱の内実の最大公約数は、「繩墨打破」の恋愛詩人としてのバイロンへの激しい共感といったものであったと見ることが出来る。彼らはバイロンを、「繩墨打破」の恋愛詩人として見定めながら、それぞれの恋愛問題をめぐる様々な鬱屈を背景に、バイロンに対して思い入れを逞しくしていたと考えられるわけである。

三、『文學界』同人の「繩墨打破」的バイロン熱

では、「繩墨打破」の恋愛詩人というバイロン像を、彼ら『文學界』同人の脳裏に刻み込んだものは何であつたのだろうか。彼らは、同時代のバイロン言説のみならず、各種のバイロン伝やバイロン詩に直接触れており、彼らのバイロン像もそういった知的教養・情報から織り成されたものであることは確かである。が、彼らの脳裏に「繩墨打破」の恋愛詩人というバイロン像を強烈に刻み込んだのは、やはり北村透

谷の評論「厭世詩家と女性」(『女學雜誌』、明治二五年二月)であったろうと思われる。

この透谷の「厭世詩家と女性」という評論は、透谷が西洋の詩人、特にバイロンにおける恋愛と結婚の相克の問題を考究する中で、「實世界」の不自由と「想世界」の自由との間で厭世感情を募らせてゆく「厭世詩家」という人間像を描き出したものであり、逆に言えば、詩人の自我と(結婚に象徴される)社会的な「繩墨」との間の葛藤の問題と恋愛問題とが交わる地点に、「厭世詩家」の典型的存在としてのバイロン像を描き出した評論と言えるものであった。²²⁾ この意味で言うと、「厭世詩家と女性」において描き出された、厭世的自我詩人としてのバイロン像は、透谷の弟分である『文學界』同人たちが思い描いた、「繩墨打破」の恋愛詩人としてのバイロン像と、かなり重なり合う部分を持つていたと言える。ここから、『文學界』同人のバイロン像は、透谷のそれに影響されること大であったと見ることが出来る。

だが、透谷のバイロン像と彼ら『文學界』同人のそれとの間には微妙な差異があることも注意しておく必要がある。その差異は、透谷の「厭世詩家と女性」と、主題と内容の上でその影響の特に著しいと言える星野天知の「業平朝臣東下りの姿」(『文學界』第二四號、明治二七年一月)とを比較対照することによってある程度浮き彫りにすることが出来る。

天知の「業平朝臣東下りの姿」という評論は、題にある通り、「伊勢物語」を題材としながら在原業平の「東下り」の意味について論じた

文章である。この評論において、天知は言う。在原業平が東国に下ったのは、彼が「没し難き悲みと消し難き憤り」を抱いていたからである。業平は政界において十分に出世できなかったせいで、「實世界」の「情熱ある憤慨の敗將」となってしまった。そして、「大魔」の化身である「女子」との恋を不断に追い求めながら、「想世界」の中に自らの生きるべき場所を探し求め、結果彼はあてどなく漂泊する「多感多情の詩人」となったのである――。ここで「實世界」及び「想世界」という言葉が使用されていることから見ても分かるように、この評論は、透谷の「厭世詩家と女性」に多分に影響された文章であり、その論旨も「厭世詩家と女性」に非常に似通ったものであると言える。²³⁾ 透谷はバイロンを主な素材として「厭世詩家と女性」を書いたわけだが、天知は日本の「厭世詩家」である在原業平を素材として「業平朝臣東下りの姿」を書いたと言えるのであり、天知のこの論は、言うなれば在原業平論というかたちをとった天知流の〈厭世詩家と女性〉論と云うべきものであったのである。

ところで天知の「業平朝臣東下りの姿」に対する透谷の「厭世詩家と女性」の影響の大きさは、天知の論の中のバイロン言及の多さというかたちでも顕在化しているように思われる。「厭世詩家と女性」において透谷は、バイロンへの論及を議論の中に散りばめ、そこから「厭世詩家」の人間像を抽象していったわけだが、天知は、透谷によって用意された「厭世詩家」像の鑄型に業平を当て嵌めることで、「厭世詩家」としての業平像を描き出そうと試みている。その際、天知は、透

谷の手になる「厭世詩家」像の鑄型の上に落ちてはいるバイロンの色濃
い影を無視することができなかつたのであろう、バイロンと業平の共
通性や類似性を確認することで、透谷の手になる「厭世詩家」像の鑄
型に業平を当て嵌めやすくしようと努めている。言い換えれば、天知
は、「厭世詩家」像の母胎とも言うべきバイロンに業平を近づけて解釈
することで、バイロン化させた業平像を描き出そうとしているのであ
る。

具体的に指摘していこう。例えば、天知は、業平が「没し難き悲み
と消し難き憤り」を抱いて放浪したことをもって、「朝臣はまことにバ
イロニズムの人なり」(第二四號、二頁)と断言するということをして
いる。また、二條后に禁断の愛を寄せる業平について、「バイロンがメ
レーシヤヤスを見たる時の心を以て朝臣は二條の后を觀給ひしなり」
(同前、三頁)と書き、恋愛問題をめぐる業平とバイロンの内面のあり
ようを同一視するということをしている。ここで「バイロンがメレー
シヤヤスを見たる時の心」云々と言っているのは、先の禿木の「鬱孤
洞漫言」についての議論のところでも論及した、メアリー・チョワー
スという一少女に対する少年バイロンの幼い恋のことを恐らくは指し
ており、天知は、業平の二條后への恋をバイロンのメアリー・チョワー
スへの恋に擬えることで、業平に「バイロニズム」の影を読み入れよ
うとしているわけである。さらに天知は、「素より朝臣にバイロン程
の酸烈^{マヤ}崇峻なる思想のあることなければ、之れに凄篇ハロルドのある
なしと雖ども其東下りに一ふしを讀み來れば、旅情物に觸れ事に激し

て溢れ出る所異音おのづから心絃に響くものあるに似たり」(同前、四
頁)とも書き、『チャイルド・ハロルドの巡礼』の詩人バイロンと『伊
勢物語』の歌人業平とを並べて論じるということをしている。天知に
よれば、両者の間には「酸烈崇峻なる思想」の有無という差異が確か
にあるものの、共通項として「旅情物に觸れ事に激して溢れ出る所」
があるのであり、そのような同じ精神性がバイロンと業平において
各々のかたちで表れ出ているということについて、(同じ音素が環境
に応じて異なつた音として現われたものを意味する)「異音」という言
葉で天知は表現しているわけである。このように、業平とバイロンと
の間に同一性や類似性を確認しようとする天知の論述の仕方からは、
業平の人間像を透谷の手になるバイロンの「厭世詩家」像にやや強
引に近づけようとする天知の意図を看取することができる。

だが、このような天知の意図にも拘らず、業平をバイロンの「厭
世詩家」として描き出すという試みは、必ずしも十分に成功しはしな
かった。これは恐らく、透谷及び天知双方の議論において参照枠とし
て機能している(バイロンのなるもの)についての認識が、透谷と天
知の間で微妙にずれていたことに起因していると考えられる。まずは
天知の(バイロンのなるもの)への理解について見てみよう。天知の
考えるそれは、次のようなものであった。

暗夜嵬々たる危巖に立て百千の魔鬼を喚降し、叱咤號令これを驅
り之れを鞭ち、心の趣くま、氣の走るま、氣焰万丈の炎と成り

て、直往一氣、直ちに大魔を捉らへんとするもの、之れバイロニズムの光景に非ずや、大魔必竟宇宙の絶美、絶美必竟宇宙の大魔、一たび此大魔に魅せらるゝもの氣魂天地に蝕入りて何ものをか捉へずんば止まざらんとす、已に此境に到る、眼頼たゞ一物を存して勇往直行せんことを欲す、人間何が爲めに世に出しや、人間何を爲さんとて世に存するや、這般の問題は此境に立つ者の問ふ所に非ず、唯一物を捉へざるを得ざるが爲めに出で、唯一事を爲さざるを得ざるが故に存するのみ、之れが爲めには百事をも犠牲として、裸牀の『人間』と成りて勇闘せんと欲するなり、此際極めて悲惨にして何物にか執着せずんば止まず。(同前、二頁)

この引用箇所の後半の「(……)唯一物を捉へざるを得ざるが爲めに出で、唯一事を爲さざるを得ざるが故に存するのみ、之れが爲めには百事をも犠牲として、裸牀の『人間』と成りて勇闘せんと欲するなり」という一文から、天知が(バイロンのなるもの)即ち「バイロニズム」を、自身の欲するところの実現のためにはそれを阻害する全てのものを排撃してゆく「繩墨打破」の精神として認識していることを改めて確認することができる。が、ここでは、「バイロニズム」の具体的なイメージを表現している「暗夜囁々たる危巖に立て百千の魔鬼を喚降し」云々の記述に特に注目したい。これは、そのイメージの類似性から、『マンフレッド』第一幕第一场や第二幕第二場において、アルプスの高峰を舞台にマンフレッドが様々な精霊を呼び寄せる場面に拠るものと

推定することができる。つまり天知は、『マンフレッド』に表現されているが如き、形而上的な何ものかを希求し、それが得られないことに激しく悲憤慷慨して宇宙大の負の感情を爆発させるバイロニック・ヒーローの、やや大袈裟な言動のイメージのことを、「バイロニズム」という言葉で表現していると考えられるわけである。²⁴⁾

このような天知の「バイロニズム」理解は、(バイロンのなるもの)を自己の内面のありよう・自我のありようを重んじる精神的態度と認識している点において、議論全体の枠組みを天知に提供した透谷の「厭世詩家と女性」におけるそれと類を同じくするものと一応言っておくことができるであろう。だが、透谷の「厭世詩家」像、ひいては透谷の厭世的自我詩人としてのバイロン像が、ややもすると厭世から絶望、絶望から死へと展開してゆく危うさを孕んだ深刻な暗鬱さに彩られたものであるのに対し、天知のバイロン像及び「バイロニズム」理解には、そのような虚無に落ち込んでゆくような深刻さ、暗鬱さがあり感じられない、ということもまた確かである。つまり天知流の「バイロニズム」観に基づくバイロン像は、透谷がバイロンの実生活上の悲劇の中から抉り出したような、「女性」(及びそれが象徴する「實世界」)との葛藤によつて厭世の極みにまで引きずり込まれてゆくという「厭世詩家」の悲劇的な宿命の重さを殆ど感じさせるものではなく、²⁵⁾逆に、表現が大仰である分陳腐に流れ、却つてそれが一種の軽ささえ生んでしまっているのである。

透谷の論と天知の論において決定的に異なるのは、透谷が、「厭世詩

家」の厭世感情の深まりについて論じる際、結婚という出口無しの不自由の問題を見据えていたのに対し、一方の天知は、業平を予め「破婚の身」とした上で、業平に「悲憤突貫の厭世旅行」という、不自由からの脱出口を用意してしまっている点である。透谷は、「想世界」から「實世界」へと転落した「厭世詩家」が結婚生活における様々な「繩墨」と葛藤する中で厭世感情を深化させてゆく内面の論理を解析することを主眼としていたわけだが、天知はそうではなく、逆に「實世界」から「想世界」へと赴き、結局結婚生活における「繩墨」とは無縁の存在、即ち「破婚の身」になり終わった業平の感傷を描き出すというところに、自身の議論の眼目を置いている。つまり、天知の議論においては、「繩墨」がもたらす不自由の問題は実質的には論題になっていないのである。

このことは、天知が、業平の人間像を、自身の理解した「バイロニズム」のイメージを参照枠としつつバイロンに連なるような「繩墨打破」の恋愛歌人として描き出そうとしながら、その業平が打破せんとしていた「繩墨」とは何であるかという問題について曖昧な認識しか持ち合わせていなかったということを意味するものであった。このような透谷と天知の間の、「繩墨」がもたらす不自由に対する問題意識の落差・温度差は、早婚のため早くから結婚生活のもたらす様々な「繩墨」の不自由の問題に逢着せねばならなかった透谷と、当時未婚で外部の「繩墨」の問題より恋愛の苦悩という自身の内面の問題の方により多く拘泥することできた天知との間の人生経験の差に起因すると見

ることができるようと思われる。²⁶⁾

このように、天知は透谷に比べ「繩墨」の問題に対する実感が薄く、そのような天知の実感の薄さが業平における打破すべき「繩墨」のイメージの曖昧さとして表出してしまっていると考えられるわけであったが、恐らくこの実感の薄さは、自身が立論のために参照枠とした、「繩墨打破」の恋愛詩人としてのバイロン像それ自体の曖昧さにも及んでいると考えるべきであるだろう。その曖昧さが、あの大仰な「バイロニズム」のイメージとしても表出していることのできるのである。「業平朝臣東下りの姿」における断片的なバイロン言及から見えてくるバイロンのイメージは、一応「繩墨打破」の恋愛詩人と呼べるようなものでありながら、その打破すべき「繩墨」がほとんど具体性を帯びていないというあやしい人間像であり、茫漠とした外部世界における厭世感情を絶叫する「狂詩人」の域を出ないものであったように思われるわけである。

四、日清戦争と「繩墨打破」的バイロン熱

実は、この「繩墨打破」の恋愛詩人としてのバイロン像において「打破」すべき「繩墨」のイメージが欠落しているという事態は、ひとり天知にのみ当てはまる問題ではなく、「文學界」同人に等しく共通する問題であった。例えば、平田禿木は「鬱孤洞漫言」において、詩人を様々な「繩墨」で拘束しようとする「小見地の徒」に対し、「憫れむべ

きかな小見地の徒、西行あらば汝を笑はむ、芭蕉あらば一顧もせまじ、バイロンあらば靈刀一閃、詩神の前に汝が肺腑の汚血を流さむ」(二四九頁)云々と書き、「繩墨」を「靈刀」で一刀両断する「繩墨打破」のバイロン像を描き出している。だがここでは、「詩神」の名の下にバイロンの「靈刀一閃」という「繩墨打破」の大仰な身振りが肯定されているのみで、「靈刀一閃」によって斬られる「繩墨」は、ただ単に、詩人の特異性を理解しない世俗の論理一般や倫理一般として漠然と意識されているにすぎない。また、戸川秋骨も「俳人の性行を想ふ」(『文學界』第五號、明治二六年五月)において、「パウロも狂せりスピノザも狂せり太白も狂せりバイロンも狂せり、彼等果して狂ひしか世狂へるか、彼等は到底一代の大人なり、神ならぬ俳人何ぞ獨り狂せざらんや」(二二六頁)と、世の縛りから外れた「繩墨打破」の偉人の一人としてバイロンの名を挙げていますが、ここでもバイロンの「繩墨打破」の身振りとしての「狂」が、古今東西の宗教者や哲学者や詩人の「狂」と漫然と並列される中で、その具体的な意味内容をほかさされ、結果としてバイロンにとつての「繩墨」の内実がよくわからないものとなつてしまつて⁽²⁷⁾いる。さらに、馬場孤蝶も、「想海漫渉」において「猛省せよ、今此世紀の始、英國の社會益々姑息に流れ、準繩に由てのみ事を行ふ悲運は、遂に彼のバイロン、シエレーの徒をして國外に客死せしめしに非ずや」と述べ、詩人の詩想の自由な展開を阻む「益々姑息に流れ、準繩に由てのみ事を行ふ」「英國の社會」と詩人との間の葛藤を問題視してはいるが、バイロンが「英國の社會」の何を打破すべき「繩

墨」と捉えていたのか、という点をはつきりさせていないため、「繩墨」のイメージを具体的に示すには至っていない。島崎藤村にしても、「ことの秋」(『文學界』第二二號、明治二七年一〇月)の中で「バイロンいたずらに世を憤ると見るは非なり」(第二二號、一八頁)と書き、「繩墨」としての「世」とバイロンとの間の摩擦の問題を見据えてはいるが、何故バイロンが「世を憤る」に至り、「世」の何に憤っていたのか、という点について十分に自身の言葉で説明し切れていない。そしてバイロンの「繩墨打破」の身振りを表現するに当たっては、「バイロンは自然と名のついた天馬の伯樂^{うまかた}か。非か」(同前、一九頁)といった大仰な表現で逃げてしまつて⁽²⁸⁾いる。

このように、『文學界』同人たちは、バイロンの「繩墨打破」の身振りに感情移入を逞しくし、そうすることによって、「繩墨」の側からは理解されざる、自身の恋愛問題を中心とする鬱屈した思いを慰めるということをしていたわけであつたが、彼らが思い描いていた「繩墨打破」の詩人としてのバイロン像の内実が、その感情移入の激しさの割に極めて茫洋とし漠然としたものであつたということが、彼らのバイロン言説から理解される。『文學界』同人が自分たちの精神の拠り所の一つと目していたバイロンに対してさえ明確な像を描けていなかったという事態は、彼ら自身が自分たちの拠つて立つべき価値基準、彼ら自身の「繩墨」をはつきりと自覚し切れていなかったということを示していよう。ここに、『日本評論』に拠るキリスト者の言論人や『國民之友』に拠る民友社系の啓蒙的知識人らからの「高踏派」批判を許

す大きな原因があったのだと推察される。彼らが思い描いていたバイロン像は、「繩墨」の輪郭が曖昧な「繩墨打破」の恋愛詩人という、いかにも間が抜けた人間像だったのであり、このようなバイロン観に象徴されている彼らの甘い認識にこそ、宗教的な「繩墨」や社会的な「繩墨」を重視する他派からの批判が向けられる隙があったと考えられるわけである。²⁹⁾

明治二十七年は、文学史的には透谷が自殺した年であったが、社会的・政治的には何と言っても朝鮮半島における東学党の乱(甲午農民戦争)を契機として起こった日清戦争の年である。明治二十七年八月、乱の鎮圧のために半島に出兵した日本軍と清軍は本格的に戦闘を開始、そして、翌年四月の下関条約の締結までの期間、日本は明治維新以降、初めての大規模な対外戦争を経験することになる。しかも、日清戦争の勝利の後も、アジアにおける日本の権益の拡大を恐れたロシア、フランス、ドイツによる三国干渉、それによる遼東半島の還付といった出来事があり、国際環境における緊張に伴って国内的にはナショナリズムの気運が高まるという時代状況であった。これが一九世紀末の我が国の置かれた国内的・対外的状況なのであった。

このように、ナショナリズムの気運の高まりというかたちで、社会規範Ⅱ「繩墨」としての国家が時代精神の前面に迫り出している中、例えば、『文學界』同人と思想的に一面鋭く対立していた徳富蘇峰などは、『大日本膨張論』(明治二十七年)を物し、時代思潮に棹さしてゆくという旋回を遂げたわけであったが、では一方の『文學界』同人たちの方

はどうであったか。彼らは「繩墨」と対峙する個人的自我の緊張、内面の自由を掲げつつ、バイロンの「繩墨打破」の身振りに思い入れを逞しくするというかたちの、言うなれば「繩墨打破」的バイロン熱に浮かされていたわけであったが、日清戦争を機に本格的に姿を現しつつあった国家という「繩墨」に対し、彼らの「繩墨打破」的バイロンイズムはどのように向き合うことができたのか。最後にこの点について触れて本稿を閉じたいと思う。

この問題について考える上で、二等有効な材料を与えてくれるのが、戸川秋骨が『文學界』の最終号に寄せた「塵窓餘談」(『文學界』第五八號、明治三二年一月)という文章であるだろう。この中で秋骨は、「今日わが國に改革し破壊すべき程の價あるもの果して固立せるか」云々と、打破すべき「繩墨」の不在を主張しつつ、「むしろ其の主唱者自から改め破るを良しとせずや」云々と、真に打破すべきは「繩墨」ではなく自分自身である、という主張を展開している。そして、評論全体を次のような文章で締め括っている。

吾が國の現在に主義なく、思想の破るべきなし。強いて求むれば一つあり。わが國牀なり。上下幾千年わが民心を繋ぎ、わが國權を維持せしものは、國牀崇拜の觀念なり。これを倒さんはやがて、日本國を倒さん事となるべし。左れどこの觀念の時々濫用されて、發達進歩の妨をなし、事少なからず。其の業の正非は暫らく説かず、其の想の可否も言はず。試みに問ふ。いで此の國牀崇拜

の觀念を破らんと欲するものあるか。先づこれを理に求め、情に訴へて且つ意を以てこれを遂げんとするものは、盛なるかな。よし敵と雖も其の勇と氣と信とに對しては感ずべし。賣國奴の名さへ甘んじて受けん人、或は試むるを得んか。左れどこは假定なり空想なり。今はさすがに破壊すべきものなし。時運は夫れ程に低落せり。吾れ人また何をか力むべき、やむなくば理想の世界に遊び、はた力行の世界に歸らんかな。(二九九頁)

ここで秋骨は、打破すべき「繩墨」なし、と言いながら、ふと思ひ出したように、一つの例外として、「國牀」あるいは「國牀崇拜の觀念」を、打破すべき「繩墨」として挙げてゐる。日清戦争以降、時代精神の前面に姿を現してきた「國牀」あるいは国家に對し、これこそ未だ倒されざる唯一の「繩墨」であるから「繩墨打破」の精神をもつてこれを打倒すべし、と説くのである。だが秋骨は、こう主張した直後、やや慌てたように「其の業の正非は暫らく説かず、其の想の可否も言はず。試みに問ふ」と留保をつけ、「左れどこは假定なり空想なり」と述べて、前言を撤回するような素振りを見せる。秋骨は、「國牀」に對して「賣國奴」の汚名を着ることさえ厭わずに「繩墨打破」の精神で戦いを挑む人の「勇と氣と信」を称揚しながらも、自分が当事者としてそれをする気などは毛頭なく、自分は「やむなくば理想の世界に遊び、はた力行の世界に歸らんかな」などと嘯いて、逃げを打つのであつた。恐らく秋骨が打破すべき「繩墨」として「國牀」に論及した時、

秋骨の中で、「繩墨打破」的バイロン熱の燃え滓が時代状況との摩擦の中で一瞬燃え上がるうとしたのであろう。だが、すぐその火はかき消されてしまつたわけであつた。

奇しくも、この評論は『文學界』の最終号に掲載されたものであつたわけだが、『文學界』における「繩墨打破」的バイロニズムの、時勢に對する無力をさらけ出したかのような秋骨のこの評論は、『文學界』同人「繩墨打破」的バイロニズムが完全に昔日のものとなつたことを象徴的に物語るものであつたと言えるであらう。明治二七年五月、『文學界』に對する批判派との論戰の矢面に立つて戰つていた透谷が死に、盾をなくした彼らは、以降、素手で直接批判に立ち向かわなければならなくなつたわけだが、同時に國際環境における政治的・社会的緊張による時代状況・時代思潮からの圧力をも受け、自身のそれまでのバイロン熱に浮かれた氣分を反省せざるを得ない局面に立たされたのである。こうして彼らは、それまでの自分たちの輪郭の定かならぬバイロン像及びバイロニズム觀に象徴されてきた、自身の思想の空虚さを自認することを余儀なくされ、「次第に當時のバイロン熱から醒めて、思ひ／＼に新しい進路を執るやうにな」らざるを得なくなつたわけであつた。そしてその結果、「頑執と盲排との弊を打破するやうな声で充たされて居た」『文學界』にも「次第にダンテの紹介があらはれ、シエレエ、キイツ、ロセツチなどの紹介があらはれ、ついで、「激しい動搖の時が過ぎて、青春に思ひを潜めるやうな時が漸くそれに代」わりつつあるという状況が生まれることとなつたの

である。

註

- (1) 機曲生「北村透谷を吊す」(『裏錦』第二巻第二〇號、明治二十七年六月)、二七頁。
- (2) 明治前半期までのバイロンの内面に共感を寄せるバイロン言説の展開については、拙稿「明治前半期における厭世的バイロン熱の内攻過程——北村透谷「厭世詩家と女性」まで」(『緑聖文化』第一号、平成二五年三月)、一三四〇頁参照。
- (3) K. A. 「バイロン卿を論ず」(『早稲田文學』第六四號、明治二七年五月)、八九〇頁。
- (4) 同論文、「早稲田文學」第六五號、明治二十七年六月、九四四—九四五頁。
- (5) 『早稲田文學』第六四號、八八九—八九〇頁。
- (6) 薬師川虹一も、明治二十七年五・六月の『早稲田文學』に掲載されたバイロン記事二篇に、「当時としては極めて冷めた姿勢」の「本格的なバイロン研究」の登場を見ているが、「やはり当時のバイロン受容の主流はバイロンその人に対するロマンチックな心酔ぶりであった」と結論づけている点で筆者の見解とは異なる。薬師川「日本におけるバイロン受容の概観」(『英詩評論』第五号、昭和六三年六月)、八六頁参照。
- (7) 日夏耿之介は「本邦に於けるバイロン熱」(『英語と英文學』、昭和四年七月)の中で、『早稲田文學』掲載の「バイロン卿を論ず」の記事に対して、「文學史的省察も傳記的詮索もない當年の常識文學論の一にすぎない」と、論じる価値のないものとして完全否定の評価を下しているが(『日夏耿之介全集』第七卷(河出書房新社、昭和四九年)、三五九頁)、筆者は寧ろ、バイロンの伝記を熱のない調子で紹介しつつ、バイロンの文学を浅薄なものとして文學史的観点から否定評価を下すという、「當年の常識文學論」が、『早稲田文學』掲載のバイロン記事二篇(「バイロン卿の傳」及び「バイロン卿を論ず」というかたちで登場してきたこと)の史的意味を重視するものである。なお、佐渡谷重信も、この時期に「バイロン批判の声が生れた」事実を指摘している。佐渡谷「近代日本とバイロン」(バイロンの世界——生誕二〇〇年特集)(『英語青年』第一三四卷第一号、昭和六三年四月)、七頁。
- (8) この意味で、佐渡谷重信が、「明治30年代に入り、ますますバイロン熱は高まり」云々したり、「明治30年代は依然としてウェルテル熱、カーライル熱、バイロン熱という三大熱病が流行し」云々としていたりすることには賛同できない。佐渡谷「ジョージ・G・バイロンと明治期の翻訳」(『西南学院大学英語英文学論集』第二八巻第三号、昭和六三年三月)、三三三頁。
- (9) 矢野峰人『文學界』と西洋文学、(新訂版)(学友社、昭和四五年)、五七頁参照。また、藤村自身が亀井勝一郎に語った言葉の中に「私どものやつた『文學界』で、ロマンチズムといへば主

にイギリス浪漫派、バイロンなどを讀んだものです」という言葉があり、『文學界』同人にとってバイロンが特に愛読した「イギリス浪漫派」の詩人であったことが窺える。亀井『島崎藤村論』（新潮文庫、昭和三十一年）、二六四頁。

(10) 『藤村全集』第一三卷（筑摩書房、昭和四二年）、一〇六頁。

(11) 『文學界』同人については誰を同人と数えるかについて諸説あるが、本稿においては、「同人規定が曖昧であったことを認めるとすれば、同人かどうかといふことは雑誌や他の同人との親疎関係、同人として異論のない天知、禿木、藤村、秋骨の大多数がこれを同人と認めるかどうかによつて決定すべきである」という笹淵友一の見解に賛同し、藤村の認識を踏まえた笹淵の見解（最初の同人は星野兄弟、禿木、秋骨、透谷と藤村の六人で、後に孤蝶、上田敏が「仲間入り」したとする見解）を踏襲する。笹淵『文學界』とその時代』上巻（明治書院、昭和三四年）、三一九頁。

(12) 吉田精一『浪漫主義研究』（吉田精一著作集第九卷）（桜楓社、昭和五五年）、一一一頁。

(13) 『文學界』からの引用は、基本的に笹淵友一編『女學雜誌・文學界集』（明治文學全集三三）（筑摩書房、昭和四八年）に拠り、以下本文中に頁番号のみを略記する。ルビ、傍点、圈点その他は必要な場合のみ記す。なお、『女學雜誌・文學界集』に未収録の文章の引用は初出に拠り、本文中に巻号及び頁番号を記す。

(14) 引用箇所は以下の通りである。「あるご親切な決疑論者は、

私に信仰がないということをも、／無署名の出版物で喋々するの
がお好きなようだ。／しかし、その人たちを私と共に祈らせて
みよ。／すると、あなたは誰が最短の道のりで天国に行くのに
／最も適切な見解の持ち主であるかきつとお分かりになるだろ
う。／私の祭壇は山々であり、大洋であり、／大地であり、大気
であり、星々なのだ。つまり、／あの魂を生み出し、そしていつ
か受け取ってくれる大いなる「全体」から生まれでる全てのもの
なのだ。」（拙訳）

(15) 秋骨は、「近世の思潮を論ず」（戸川明三署名、『帝國文學』、明治
二九年一月）においても、「佛國革命に前後して英の突進的詩人
が、當時の抑壓制度に満足せずして、或は宗教的に或は社會的に
切りに當り當時に反抗せしは、其の行爲に於て見るべく其の製
作に於て見るべし、バイロンの「マンフレッド」には其の不滿の
聲を聞くべく、シェレールの「プロメシアス」には其の反抗の氣焰
を視ふべし」云々と書いており、ここでもバイロンを「繩墨打破」
の詩人として見る見方を披露している。

(16) 笹淵友一は、直接的にはバイロンに論及していないものの、「繩
墨打破」的な『文學界』初期のバイロニズムの一つの現はれ」と
して、星野天知の「狂僧、志道軒」（『文學界』第五號、明治二六
年五月）を挙げている。笹淵によれば、「天知の志道軒論は社會
の「偽善偽徳」を惡み、「繩墨をすたく」に引切」つた、いはばバ
イロンの志道軒論」である。笹淵前掲書（上）、四八五頁参照。

- (17) 平田禿木の星野勇子との関係については、笹淵前掲書(上)、五四六頁参照。また、笹淵によれば、禿木の恋愛は、彼が一高入学の頃(明治二三年頃)より始まったと推定されるが、同時期、禿木は学校の図書館でバイロンの『チャイルド・ハロルドの巡礼』を読み耽っていた。同書、同頁参照。
- (18) 田吹長彦『ヨーロッパ夢紀行——詩人バイロンの旅(ベルギー・ライン河・スイス編)』(丸善出版サービスセンター、平成一八年)、一八〇—一八七頁参照。
- (19) 星野天知の松井まんとの関係については、笹淵前掲書(上)、四五八—四五九頁参照。
- (20) 同書、五一三頁参照。また、笹淵は、秋骨の「變調論」への透谷の「内部生命論」「萬物の聲と詩人」の影響を指摘し、「『文学界』同人の中でも最もバイロンの透谷を通じて秋骨の中にもバイロニズムへの共感が起つた」とも論じている。同書、五一四頁。
- (21) 「みをつくし」の作中人物の恋愛が、「主として孤蝶自身の恋愛体験を踏まへてゐる」ということについては、同書、七一—九頁参照。ただし笹淵は、孤蝶が「バイロンの詩集、エルテルが愁など」に感化された広田(「みをつくし」の男主人公、筆者注)の情緒に対して屢々冷い批判を加へてゐるのを、「色情の肯定」という立場からの「孤蝶自身の恋愛に対する自己批判或は自己主張といふべきもの」と捉えている。同書、七二—〇頁参照。
- (22) 「厭世詩家と女性」を一種のバイロン論と見る見方については、前掲拙稿を参照のこと。
- (23) 十川信介は、「実社会における結婚よりも「霊界の結婚」を重んじる天知の恋愛観」を表現した「草庵の澁茶」(『白表女學雜誌』第三三九號、明治二六年二月)も、「透谷の「厭世詩家と女性」に通じ」る評論として挙げている。十川「不健全な文学I」「ドラム」・「他界」——明治二十年代の文学状況(筑摩書房、昭和六二年)、一九八一—一九九頁参照。
- (24) 笹淵友一も、天知の「業平朝臣東下りの姿」に触れて、天知が「業平の悲憤と情熱とをマンフレッドのバイロニズムと見るのは一つの思ひつきであり、文学史観のアクセサリである」と述べ、天知の業平的バイロニズムのイメージの源泉に、マンフレッドの影を見ている。笹淵前掲書(上)、四八四頁。
- (25) この「重さ」の問題については、前掲拙稿を参照のこと。
- (26) 勝本清一郎は、透谷の恋愛観と他の『文学界』同人のそれとの落差に触れて、前者のそれが非童貞の精神主義的恋愛観であるのに対し、後者のそれは童貞の初心なプラトニックなものであった、と説明している。勝本『近代文学ノート2』(みすず書房、昭和五四年)、一二〇頁。
- (27) 笹淵友一は、秋骨のバイロン及びシェリーに対する感銘を、「彼がキリスト教の雰囲気の中で育ち、その感化を受けてみただけに却つて彼自身の中に所謂繩墨打破の情熱が喚びさまされた」

結果と捉えている。だが、笹測自身、「それは秋骨の精神的傾向の一面にとどまる」と留保をつけている通り、キリスト教は秋骨にとって打破すべき「繩墨」の唯一のものであったというわけではない。笹測前掲書（上）、五〇二頁参照。なお、笹測は、秋骨が「バイロニズムの感化」と「宗教に対する懷疑」を、創作「迷夢」（『文學界』第二〇號、明治二十七年八月）の中に結晶させていると論じ、「超俗主義と現実主義の間で、バイロニズムの嵐に揉まれてゐるのが当時の秋骨であつた」と結論づけている。同書、五七一―五一九頁参照。

(28) このことは、藤村の即興詩「六子に寄するの詩」の中の「バイロンをあはれみて戸川棲月に寄す」についても、同様に言うことができる。笹測友一は、この短詩に、「世俗に対する反逆或は世俗からの超越、激しい感情の動揺、ますらをぶり、世界觀的苦惱の翳といつた」「一口にいへばバイロニズム」の気分が横溢しているが、それがただ単に「情熱的ポーズを示す語句」で散漫に表現されているだけであり、「文学精神の問題として明確に把握されてゐるわけではな」い、と論じている。同書、九五二―九五二頁参照。

(29) 十川信介は、『文學界』同人の「實」輕視の姿勢を「不健全」と見なす徳富蘇峰や山路愛山の批判に論及しつつ、透谷を除く『文學界』同人の世間一般に対する否定の姿勢の弱さを指摘している。このことも、透谷を除く『文學界』同人における「繩墨」に対す

る意識の曖昧さの表れの一つと考えることができよう。十川前掲書、一九七―二〇二頁参照。

※紙幅の都合上、参考文献リストは註記で代えさせて頂く。

Rebellious Byronism among the Members of *Bungakukai*

Yūki KIKUCHI

Abstract

In May 1894, Tōkoku Kitamura, representative of the Byromaniacs in the Meiji period, committed suicide, which gave younger members of the literary magazine *Bungakukai* an opportunity to liberate themselves from Byromania or Byronism. For these younger members, Byronism meant a rebellious spirit against social, moral and religious norms, modeled after various exaggerated anti-social or anti-Christian images extracted from Byron and Byronic heroes. Whilst the younger *Bungakukai* members' enthusiasm for Byron was formed under the influence of Tōkoku's Byronism, the former was less serious and thoughtful than the latter. Arguably, it derived from the fact that these younger literati were too inexperienced and innocent to be able to discern norms to challenge and break down, while Tōkoku came to realize the restraints of social norms through his bitter married life. Their naïve lack of awareness of norms to challenge is the reason why they could not help giving up their own vague Byronism after Tōkoku's death.

Key words; Bungakukai, Byron, Byromania, Byronism, A Rebellious Spirit